

## 発達障害を抱えた子どもたちの思春期課題

平岩 幹男

Rabbit Developmental Research

【はじめに】発達障害には自閉症スペクトラム障害やADHD、学習障害などが単独であるいは重なり合って社会生活上の困難をもたらすことがあるが、ライフサイクルの時期によって抱える課題は変化する。思春期には発達障害が本来抱える症状のほかに、それによってもたらされたかもしれない二次障害などが見られることもあるし、適切な対応を図ることによって、社会生活上のあるいは将来の生活における負担を軽減することにつながりうる。

【思春期とは】思春期の定義はわが国では10～15歳の主として二次性徴などの身体的変化を中心として扱われてきたが、国際的には心理・社会的な側面も含めて、10～21歳ころを思春期として扱うことが多くなってきた。小児期から成人期への移行の段階であり、発達障害を抱えている子どもたちにとっても医療や社会的支援（児童から成人になり、年金や就労なども考える必要がある）など、将来に備えて知っておいた方がよいことも多くなる。

【告知と受容】自分と他人との違いが気になり始める時期でもあり、保護者に見守られる状態から、当事者として自分の健康のことを考える時期にもなる。告知は単に診断名をつけるものではなく、演者は子どもたちが将来目標を設定しやすいように考えて準備し、行っているが、それはすぐに受容できることを意味するものではなく、時間を要することも多い。

【生活面での問題】性の問題やICT関連の問題をはじめとしてこの時期に直面する課題は多いが、知っておくべき知識を整理して伝える必要がある。しかしこの面では学校教育においても家庭教育においてもなかなか十分とは言えない。

【行動やコミュニケーションの問題】発達障害を抱えているとこれらの面での課題を抱えることが多く、それは注意されることや叱責されることにつながることも多いので、self-esteemの醸成にはつながりにくい。不適切行動を我慢すればほめられることを、トレーニングで獲得することによって行動変容を促す方法もある。

【自立とは】思春期には成人期での自立が目標として設定され、それに向かって行動することが勧められることもあるが、自立に至る道は様々であり、自立は目標にはなるが、ゴールではないということを子どもたちにも保護者にもお話している。